

今週の為替相場見通し(2021年3月8日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		106.37 ~ 108.64	108.40	107.50 ~ 109.50
ユーロ	(ドル)		1.1893 ~ 1.2113	1.1908	1.1850 ~ 1.2050
(1ユーロ=)	(円)		128.20 ~ 129.63	129.13	128.50 ~ 130.50
英ポンド	(ドル)		1.3779 ~ 1.4017	1.3831	1.3700 ~ 1.3900
(1英ポンド=)	(円)	*	148.12 ~ 150.73	149.92	148.50 ~ 150.50
豪ドル	(ドル)		0.7624 ~ 0.7839	0.7680	0.7600 ~ 0.7800
(1豪ドル=)	(円)	*	82.09 ~ 84.04	83.28	82.30 ~ 84.80

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第一チーム ローゼンタール 洋輝 ロイ

(1)今週の予想レンジ: 107.50 ~ 109.50 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

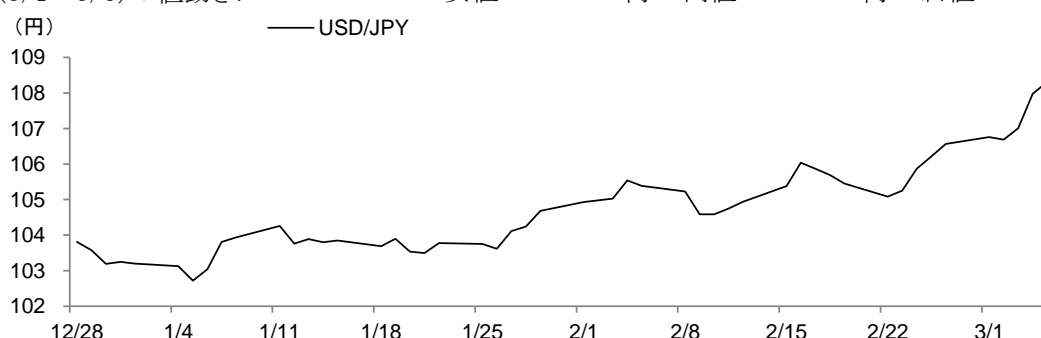
先週のドル/円は上昇。週初106.48円でオープンしたドル/円は、日本株をはじめアジア株が大幅高となったことで円売り優勢の展開。Fed高官から米金利上昇を容認する発言が伝わると、米金利は底堅く推移し、ドル/円は106円台後半まで小確りと推移。翌2日の東京時間は前日からのドル買い地合いが継続し107円手前まで堅調に推移。海外時間に入り米金利が低下する展開にドルが売り戻されると、106円台半ば付近まで下落。週央、米金利上昇にも一服感が見られる中、ドル/円は106円台半ば付近を動意乏しい展開。欧州時間に入り、欧州債が売られたことで米債も連れたのか、米金利が再度上昇を開始すると、ドル/円は昨年7月23日以来のレベルである107円台を突破。その後は、翌日のパウエルFRB議長の講演を控え、107円台前半を推移。翌4日、岡村財務官から現行の緩和スタンスを維持する旨の発言があると、円売りの展開となり107.40円付近まで上昇。注目されたパウエル議長のインタビューでは米金利上昇への懸念が特段示されなかったことで、米金利が急伸する展開に、ドル/円は108円手前まで上昇。週末、引き続き堅調な米金利と市場予想を上回る雇用統計の結果に週高値108.64円をつけた。一巡後は米金利の低下によってドル/円も下押しされ、108.40円で越週した。

今週のドル/円は底堅い展開を予想する。先週はリフレトレードにより、安全通貨である日本円は全面安、ドル/円は昨年6月以来となる108円台にのせた。先週末に発表された米国の貿易収支や失業率、非農業部門雇用者数は堅調な結果となり、また、今週早々にもバイデン大統領の追加経済対策が下院でも可決される見込みであることを考えると、市場のリスク許容度拡大に伴いドル/円は確りと推移するであろう。加えて、日米金利差という観点からもドル/円はサポートされ则认为。米金利は2月下旬に1.6%まで上昇後も高止まりしているが、パウエルFRB議長からは足元の金利上昇を容認するスタンスが示されている。一方で本邦サイドでは、黒田日銀総裁から、長期金利変動幅を拡大する必要はないという発言がなされており、上昇した長期金利を抑え込むような発言が確認できている。2国間での金利差が更に拡大していく可能性は高く、ドル/円の上昇材料となるだろう。

(3)先週までの相場の推移

先週(3/1~3/5)の値動き:

安値 106.37 円 高値 108.64 円 終値 108.40 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 営業第二チーム 原田 和忠

(1) 今週の予想レンジ: 1.1850 ~ 1.2050 128.50 ~ 130.50 円

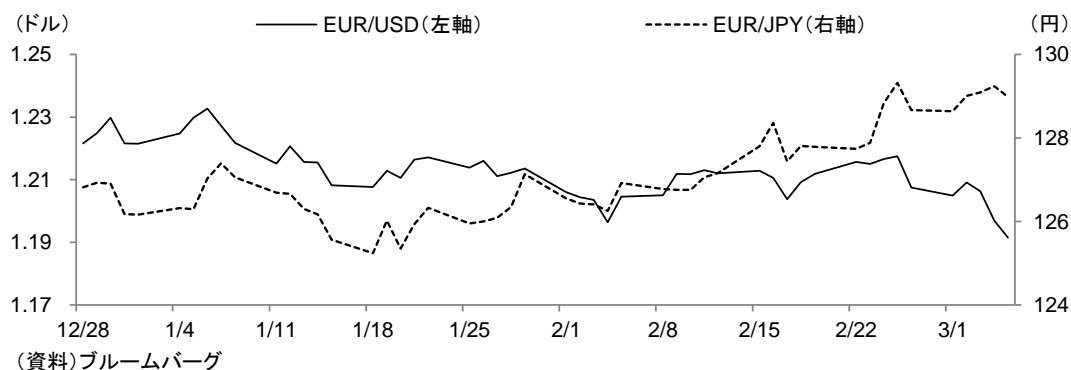
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は軟調推移。週初1日、1.20台後半でオープンしたユーロ/ドルは、1.21台前半まで上昇する場面も見られたが、ドル買い優勢地合いに1.20台前半まで下落した。2日は、デギンズECB副総裁は利回りが調達環境を悪化させているかを見極める必要があると話したことを受けて、ユーロ売りが強まり、他通貨に対してもドルの選好が引き続き堅調となった中、ユーロ/ドルは、1.19台後半まで値を下げた。その後は、米金利が低下する動きにドル売りが強まると、ユーロ/ドルは、1.20台後半まで回復した。3日には、ECBの関係筋の話として「債券利回りで劇的な行動の必要はないとの見方」との話が伝わると、ユーロ/ドルは一時週高値となる1.2113をつけたが、ドル買いが強まる展開に1.20台前半まで反落。4日は、ユーロ売り優勢地合いの中、パウエルFRB議長の米金利上昇を容認する内容の発言を受けドル買いが強まると、ユーロ/ドルは続落し1.20を下抜けた。5日も、続落。じりじりとユーロ/ドルは売られる中、海外時間に一時1.19割れを示現。その後は1.19台前半でもみ合い推移し、1.1908で越週した。

今週のユーロ/ドルは、下落を予想する。リフレトレードが活発化し、マーケットがFEDの利上げ時期の予想を前倒しする中、ベアスティープニングし始めている米金利の動向に注目だろう。米10年債利回りは先月末に、2020年2月以来の1.6%台をタッチした。これまで多くの市場参加者が当面の米10年債利回りの上限を1.5%として意識していたが、予想外に1.5%を大幅に超える展開となったことで、週末には再び1.6%台を付ける場面もあった。一方、ECBはパンデミック緊急購入プログラム(PEPP)の買い入れペースを減速させているものの、足許は口先介入だけで米債に比し利回りの上昇抑え込みに成功している。かかる状況下、金利差拡大によってユーロのパフォーマンスは劣後しそうだ。加えて、これまでユーロ高地合いが継続していたことに鑑みると、これまで溜まったロングポジションも重しとなろう。このことから引き続きユーロ/ドルは軟調な動きを想定する。重要なイベントとしては、3月5日(金)より中国全人代が開幕中。3月9日(火)にユーロ圏GDP(確報)、11日(木)にECB政策理事会が予定されている。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(3/1~3/5)の値動き: (対ドル) 安値 1.1893 高値 1.2113 終値 1.1908
(対円) 安値 128.20 高値 129.63 終値 129.13



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.3700 ~ 1.3900 148.50 ~ 150.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、方向感を欠いた横這いの先行から、週後半にかけて、対ドルで下落。ただし、並行して円、ユーロなどに対してはむしろ水準を切り上げており、この局面の値動きはドル高と受け止めることができた。実のところ、この間の通貨市場で、最も端的な動きは、米長期金利上昇に伴うドル全面高だったと言える。そもそも、バイデン政権による積極的な財政出動や、新型コロナウイルスのワクチン接種の進捗による景気回復期待などを背景に高まったインフレ警戒感が、「リフレ取引」という形で、世界的な長期金利上昇につながっていた。とりわけ、先週後半にかけては、4日、米連銀パウエル議長が、米長期金利上昇に対して特段の対応策を示さなかったことが「長期金利上昇を看過」する姿勢と読まれ、米10年国債利回りは(2月末に続けて)再び1.50%を越えて急上昇(国債価格は下落)。更に、翌5日発表された米2月雇用統計が、非農業部門雇用者数の上振れ、失業率の下振れなど力強い内容で、米長期金利を、昨年2月来の高水準となる1.62%超にまで、もう一段押し上げる局面を見た。英固有の要因では、3日発表された予算が注目を集めたものの、ポンドに与えた影響ははっきりとは読み取れなかった。ドル全面高が進む中、円やユーロに対して相対的にポンド下落が小幅にとどまった背景を敢えて挙げるとしたら、引き続き、新型コロナウイルスワクチン接種の相対的な進捗を好感した可能性は、やはり考えられた。そういう意味では、上述予算発表で、一時帰休補助金支給や一部付加価値税減税などを、ロックダウン解除が予定される6月を優に越えて9月末まで延長したことなども、景気下支え要因として好感された可能性も考えられた。

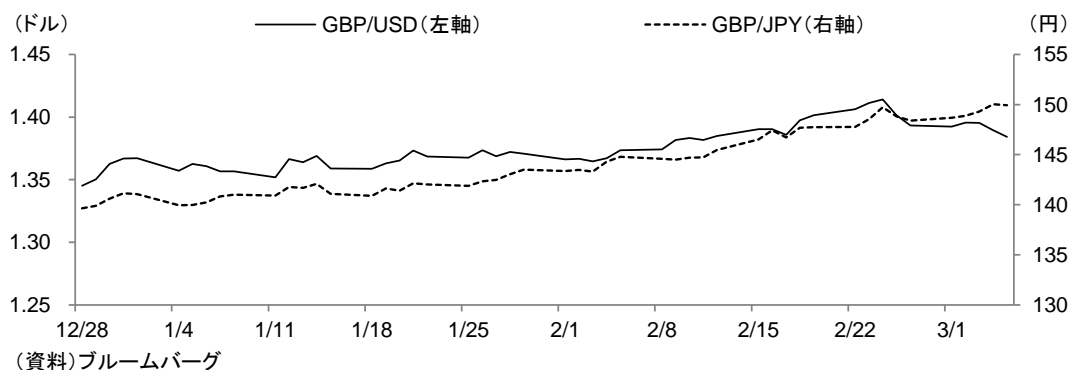
今週の英ポンド相場は、対ドルで続落を予想。対円、対ユーロでも頭打ちから軟調を予想する。1月央以来、上下動を織り交ぜながらも趨勢として着実に縮小してきた米英長期金利差(10年国債利回り格差)に、3月に入って異変が起きた。米長期金利の引き続きの騰勢を他所に、英長期金利が頭打ち、縮小してきた長期金利格差が一気に拡大、1月央の水準に戻ってしまった。英長期金利頭打ちの要因は定かでないものの、わからない以上、今後、上がるとも、下がるとも判断はつき難い。仮にこの傾向が続くのであれば、ポンドには、対ドルに限らず、大きな重石となろう。3日に発表された予算は、各種新型コロナウイルス対策の延長、法人税率引き上げなど、事前に観測された内容が盛り込まれた一方、個人所得税控除額などの引き上げ4年間凍結、向こう2年間の投資に対する130%の大型控除などには目新しさもあったはず。今般の予算は、一般に、「目先遣って、後で回収」という評価を受けたが、中期的にはふたつの視点を投げ掛けたのではないかと。一点目は、投資に対する大型控除は、勿論、英に対する投資呼び込み/生産性向上を主眼としたものだが、2年間の控除が切れた途端に、法人税率が引き上げられる(それでも、税率はG7の中で最低にとどまる見込みというが)と分かっている、積極的に英に(英で)投資する企業がどれだけいるか? という点。もう一点は、個人所得税の(賃金上昇=物価上昇分に対する)実質増税を2022年4月に、法人税率引き上げを2023年に控え、早期解散総選挙の可能性を観測する声が、既に一部で聞かれていること。次期総選挙は2024年5月までに実施される予定だが、確かに、増税が本格的に実態経済に負荷を加える前に、保守党政権が解散総選挙に打って出る可能性は考えられなくもないだろう。上記2点は、勿論、目先の材料ではないが、英のEU離脱の影響なども勘案し、今後の英経済の行方を占うヒントとして念頭に置いておきたい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(3/1~3/5)の値動き:

(対ドル) 安値 1.3779 高値 1.4017 終値 1.3831

(対円) 安値 148.12 高値 150.73 終値 149.92



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

(1) 今週の予想レンジ: 0.7600 ~ 0.7800 82.30 ~ 84.80 円

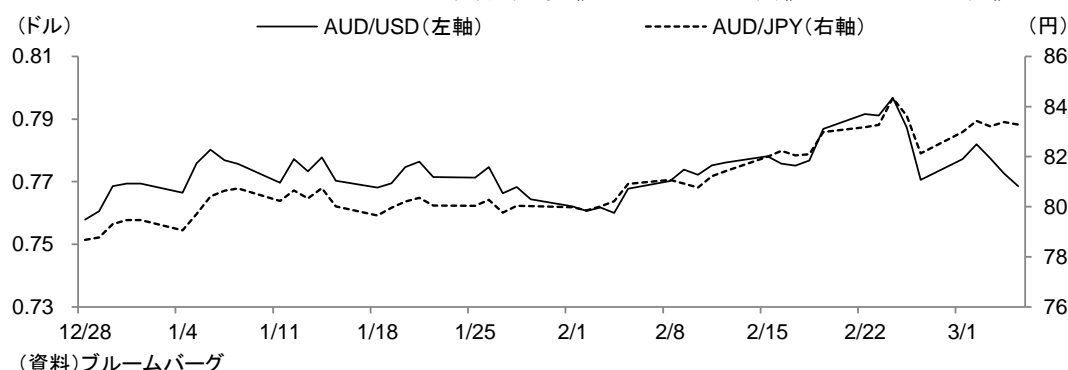
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は上は0.78台、下は0.76台と値動きの荒い一週間となった。1日、この日発表された豪経済統計が軒並み堅調な結果となったことが支援材料となり、豪ドルは0.7770台まで上昇。2日、RBAは政策金利を現状の0.1%に据え置き、その他の緩和政策も全て現状維持を決定。現状維持は多くのエコノミストが予想していた為、豪ドルの反応は小幅上昇にとどまった。発表された声明文でも、YCCに関しては特段注目される文言は含まれず、QEに関しては「必要があれば更に国債を買い入れる」との記述があったが、市場にサプライズを与える内容では無かった。欧米時間に入りリスク選好度の高まりとともに米ドルが下落すると豪ドルは0.7820付近まで上昇して引けた。3日、予想以上に堅調だった豪Q4GDPの結果などが支援材料となりアジア時間内は小高く推移。NY市場時間に発表されたADP雇用統計や米2月ISM非製造業が弱い結果となったことで株価が下落に転じると豪ドルに下値圧力がかかり一時0.7770付近まで下落した。4日、米株先物の下落とともに豪ドルも0.7750辺りまで下落。しかし前日の米金利上昇の流れを受けて豪ドル金利が大幅上昇すると、豪ドルはすぐに上昇に転じ一時0.7815近辺まで戻す。パウエルFRB議長講演では、現在のFRBの政策スタンスは適当とし、最近の米金利の急上昇については「注目に値し、留意している」としつつも、「無秩序」な動きとも、介入が必要とも考えていないと発言。これを受けて米10年国債利回りは1.55%を超え上昇し、イールドカーブはスティーピングが進行。株安・米ドル高の反応となり、豪ドルは一時0.7710近辺まで下落した。5日、アジア時間内は軟調な株価が重石となり上値の重い展開に。NY市場時間に発表された米2月雇用統計が予想以上に良好な結果だったことを受けて、米長期金利が1.62%まで上昇。これを受けて米ドルが瞬間的に買われ、豪ドルは一時1カ月ぶり安値0.7624まで下落した。その後は米債への買いが入り米ドル上昇の流れが鈍ると、豪ドルは0.7690近辺まで戻した。

今週の豪ドル相場は上値の重い展開を予想する。2月下旬に0.80を付けた後、足元調整基調が続いている。2月下旬以降、RBAによる積極的な国債買い入れオペレーションが続き、現在の金融政策への強いコミットメントを示したことや、米金利の上昇が豪ドルの上値を抑えている。先週金曜日発表された米2月雇用統計は市場予想を上回る良好な結果となり、又、週末には1.9兆ドル米追加法案が可決されたことから、今週は米金利に更なる上昇圧力がかかると予想される。株価の上昇がサポート材料となりつつも、豪ドルは上値の重さが続くと考え。10日の予定されているロウRBA総裁によるスピーチに注目したい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(3/1~3/5)の値動き: (対ドル) 安値 0.7624 高値 0.7839 終値 0.7680
(対円) 安値 82.09 高値 84.04 終値 83.28



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。